

③ 景観の課題

砺波平野の散居景観は、人々が水の豊かな扇状地という自然特性を生かし、長い年月による農作業や日常生活を通してつくり上げてきたものです。しかし、そこに生活する人々の暮らしや考え方が変わるにつれ、散居景観も変化してきています。また、都市化の影響等により、散居景観を損ねる建築物や屋外広告物も見られるようになってきました。

その背景には、社会の変化に伴う住環境と生活様式の変化、農業経営の変化などがあります。今後も様々な変化が予想されることから、日本を代表する農村の原風景である散居景観をはじめ、豊かな自然に恵まれた森林景観や市街地景観をどのように保全し、創出していくかが課題となっています。



三条山展望台からの眺望



(1) モータリゼーションの進展による変化

我が国は、昭和40年代以降の高度経済成長による急速なモータリゼーション（車社会）の進展など、大きな発展を遂げました。本市においては、昭和30年代後半から、ほ場整備や道路網の整備、農地転用による住宅団地や工業団地の造成などが進められてきました。また、道路整備や産業構造の変化により、自動車通勤が容易となったことに加え、農業の機械化により余剰時間が増加し、農業の兼業化に拍車がかかりました。

また、一世帯当たりの自動車保有台数の増加や広い幅員の道路の整備、市街地・商業圏域の拡大などにより、郊外型の大規模小売店舗や沿道の商業施設が出店し、建築物や屋外広告物により背後に広がる散居景観の損なわれている箇所が見られるようになりました。一方、既成市街地では、集客力が低下し、空き店舗が目立つようになっていることから、中心市街地の活性化が求められています。

さらに、北陸自動車道などの高速自動車道の整備により、首都圏や近畿圏、中京圏への交通の利便性が向上した反面、その工法が盛土によって施工されたことから平野部は分断され、散居景観は大きく変化しました。



幅員の広い道路



北陸自動車道 砺波 IC

(2) 住宅団地などの整備による変化

昭和40年代になると、ほ場整備が完了した農村に大規模な住宅団地などが造成され、緑の少ない住宅団地が見られるようになりました。昭和50年から平成24年までの37年間に、田や畑が785ha減少し、宅地は640ha増加しています。

また、新たに開発された住宅団地や商業施設、工場などの中には、外壁材の技術向上やニーズの多様化から、様々な色彩で仕上げられた外観が緑豊かな散居景観を損ねているものも見られます。



住宅団地の状況(平成15年頃)

(3) 農業経営と生産基盤の変化

散居における稲作中心の農業は、ほ場整備が完了したことで大型機械化が進み、労働生産性が大きく向上したことにより余剰労働力が生じ、兼業化が急速に進行しました。

また、米の生産調整、農用地利用増進事業など、農政の転換に応じた農業経営が行われてきましたが、農産物の輸入自由化による国内農業の競争力低下や米価の下落、地域特産物の伸び悩み等により農業所得が減少するなど、農業の魅力が低下しています。

さらに、後継者不足や離農などが進むことから、集落営農組織や新たな担い手農業者の育成を図り、生産性の高い認定農業者などへの経営移譲が行われていますが、住宅団地などの造成を目的とした農地転用により、農地は減少しています。

今後、散居景観の重要な要素である水田を保全し、農業従事者の減少に歯止めをかけ、担い手の育成と確保を図るとともに、丘陵山間地で見られる耕作放棄地を復元することも課題となっています。

また、農業用水路は、ほ場整備により三方コンクリートで整備されるとともに、生活雑排水の放流により水質が悪化しました。このことにより、動植物が減少するなど、日々の生活における水路との関わりも薄らいでいます。



稲刈り（第5回となみ野散居村フォトコンテスト）

(4) 伝統的家屋の減少

昭和30年代以降、住宅建材等の技術向上や人々のニーズの多様化などから、市民の生活様式は大きく変化し、経済性、実用性などが追求されるようになりました。

伝統的家屋の改築等の際には、雨戸はアルミサッシに変わるなど、安価で性能が良く、入手が容易な建材を用いた住居へと大きく変化しました。また、母屋と一体となって景観を形成していた納屋や灰納屋などの附属屋は、農業経営や生活様式の変化によって取り壊され、車庫などに建て替えられています。

近年では、少子高齢化や核家族化により、一世帯の構成人数が減少していることから、伝統的家屋の母屋が広すぎるため、維持管理の負担が重くなっており、コンパクトな家に建て替えられるものも見られます。このほか、屋敷林を伐採して、敷地内に母屋とは別に小規模な住宅を建て、二世帯が別々に暮らす住宅も見られるようになり、従来の建築物の構成と異なるものもあります。

さらに、伝統的家屋が空き家となって管理されない場合、荒れたままに放置され、雑草の繁茂や小動物のすみかとなり、散居景観を損なう原因にもなっています。

また、空き家の増加や少子高齢化などにより、地域の伝統行事やまちづくりの担い手が不足するなど、地域コミュニティの希薄化とともに、伝統文化の継承が課題となっています。



納屋(ナヤ)



灰納屋(ハイナヤ)



伝統的家屋(マエナガレ)

(5) 屋敷林の減少

住宅建材等の技術向上に伴い、耐久性に優れた住宅が建てられるようになり、これまで果たしてきた防風雪林としての屋敷林の役割は薄らいできました。特に、建築物の高気密・高断熱化と冷暖房設備の向上など、住宅の近代化が進んだことは、屋敷林に対する人々の意識を変えてきています。

かつて燃料として重宝されたスンバは、電気、ガス、石油といった代替燃料が用いられることにより使用されなくなる一方、雨どいに詰まるなど、日常生活に不便ももたらすため、その処理や利活用が課題となっています。

また、屋敷林を永続的に維持管理していくために必要な枝打ちや防除などは、住民に大きな負担となっているとともに、その技術も失われつつあります。中でも、高齢者世帯などでは、維持管理が十分に行き届かず、樹形を大きく崩した過度なせん定や高木の伐採が行われ、緑豊かな屋敷林が減少しています。

こうした生活様式の変化や維持管理の困難さに加え、平成16年には例の少ない風向きの台風23号による倒木で住宅等が壊れる被害が発生したことにより、危険を回避するために屋敷林を伐採する家が見られます。散居景観を構成する重要な要素である屋敷林を今後とも保全していくため、その効用と効果の理解を深めるとともに、維持管理に関する技術の継承や支援が課題となっています。



屋敷林のある散居景観

(6) 自然景観の変化

芹谷野段丘や庄東山地などは、眺望景観として散居景観の背景にもなっています。しかし、大規模な建築物や工作物などにより、山並みの美しさの連続性を損ねているほか、丘陵山間地では、物品の堆積や廃棄物の不法投棄などにより、景観が損なわれている箇所も見られます。

また、山村集落の少子高齢化や木材の輸入自由化などにより林業経営が悪化し、維持管理の行き届かない山林では荒廃や竹林の侵食が進み、良好な森林の景観が損なわれています。

一方、庄川の沿岸においては、市民団体が中心となって育成や保全に努めているエドヒガンザクラの群生地、堤防道路の桜並木、近年整備された桜づつみなどが人々の心を癒やしてくれます。しかし、老木となって枯損しているものも見られることから、維持管理を含めた保全が課題となっています。

さらに、ガードレールや標識などの附帯構造物は、色彩や形態が周辺の景観を損ねているものも見られます。



丘陵山間地の農地



丘陵山間地の集落



松川除前堤と桜並木

